第24回日本水大賞　応募用紙

（整理番号：　　）

活動の名称	フリガナ　18ネンケイゾクスルサイガイデンショウカツドウ ～ショウワ28ネンチクゴガワダイスイガイヲツタエルカイ～ 18年継続する災害伝承活動～昭和28年筑後川大水害を伝える会～									
記入年月日	活　動　主　体					活　動　分　野				
年　月　日	該当する活動主体に〇（1つまで）					主な活動分野に◎（1つまで） その他関連する活動分野に〇				
	学校 （　）	企業 （　）	団体 (〇)	個人 （　）	行政 （　）	水防災 （◎）	水資源 （　）	水環境 （〇）	水文化 （〇）	復 興 （　）

活動主体の概要

活動主体の名称（個人応募の場合は個人名）	フリガナ　チクゴガワマルゴトハクブツカンウンエイインカイ 筑後川まるごと博物館運営委員会		
代表者名（団体の場合）	フリガナ　アサミ　ヨシツユ 浅見　良露	設立年月日	2003年　3月　7日
所 在 地	フリガナ　フクオカケン　クルメシ　コクブマチ 福岡　県　久留米　市　国分　町		
主な活動地	福岡県久留米市および筑後川流域		
組織の概要（個人の場合は履歴を記入）	当会は久留米大学の公開講座「流域講座」の受講生や大学の先生方が中心となり、筑後川流域をまるごと一つの博物館とみなして、ありのままの川の姿を流域内外の人々に伝えることを目的とした市民団体として発足した。今では、流域で活動する団体や研究者、また自らが講師となる「流域講座」を継続しつつ、筑後川防災施設「くるめウス」を拠点に大人向け学習会や子供向け環境教室を開き、筑後川を身近に感じてもらう活動を行っている。		

応募活動の概要：

平成15年の筑後川防災施設くるめウスの開館を機に始まった「昭和28年筑後川大水害写真展」と「昭和28年大水害証言発表会」は今年で18年になる。「写真展」は当初九州大学所蔵の写真を使用して開催し、その後一般から公募して集めた多数の写真も使い、当時の状況を伝える充実した企画展となっている。また体験者がその当時を語る「証言発表会」も、災害を知らない世代にとっては水害の怖さや防災の大切さを知る機会となっている。5年前からは地域の公民館等においてもこれらを開催し同時に子供向け防災教室も実施している。災害が多発している筑後川流域住民が過去の災害の記憶を取り戻し、後世に伝える絶好の機会を与えている。

応募活動のアピールポイント：

・水害写真展と証言発表会の18年継続実施
・写真に貼る付せん紙や証言ノート等で情報収集
・聞き語り部が写真の詳細な解説と教訓を伝える
・流域住民に過去の災害伝承の場を提供
・市民レベルでの気候変動対策の提案(SDGｓ13)

これまでの受賞歴：[この活動に限っての受賞歴は無い。以下の3件はこの活動を含む団体活動に対して]
平成19年度(社)日本河川協会から河川功労者表彰、平成26年度国土交通行政功労表彰(国土交通省筑後川河川事務所長表彰)、平成28年度国土交通行政功労表彰(国土交通省九州地方整備局局長表彰)
※日本水大賞におけるこれまでの応募実績：第(8，22，23)回、受賞歴：第(8)回（厚生労働大臣）賞

「日本水大賞」をどこで知りましたか？（数字に〇印を付けて下さい）

1．新聞広告　2．官庁内ポスター　3．日本河川協会ホームページ　(4．水大賞事務局からの案内)
5．国の機関からの誘い　6．県・市町村からの誘い　7．教育関係機関
8．日本河川協会ホームページ以外のインターネットの情報　9．その他（　　）

（整理番号：　　）

活動の概要

目的：

この災害伝承活動の目的は次の4つにまとめることができる。①昭和28年筑後川大水害の当時の人々の記憶や情報を集める。②筑後川流域が大災害を被った当時の状況を人々に伝える。　③体験者の証言や当時の写真から得られる災害の教訓を今に活かす。④　次世代へこの記憶を語り継ぎ、いつでも起こりうる災害への備えを怠らないようにして減災につなげていくことを目的としている。

今から68年前の昭和28年に私たちが住む筑後川流域において、堤防決壊などによって未曾有の大水害が起こったことを知る人も少なくなってきた。その浸水範囲は広大な筑後平野の大部分に及び、被災者数54万人を数えるなどの大被害をもたらした。その体験を有する方はすでに高齢となり、体験を語って下さるほとんどの方が70歳後半を超え、その記憶は消え去ろうとしている。

しかし、平成30年から令和3年にかけて、筑後川中流域の久留米市では4年連続で5回の浸水被害に見舞われ、改めて昭和28年大水害を思い起こさせた。近年頻発する水害に対して、私たちは過去の水害を風化させず、先人の体験や教訓を学び今に活かして、きちんと後世に語り継ぐ必要がある。

内容：

１．　昭和28年筑後川大水害写真展

平成15年に写真展を始めた当初は、九州大学所蔵の多数の災害写真から約1,600枚の流域の写真の提供を受け、その中から約400枚を選定して、上流,中流,下流とゾーンごとに張り付けた展示パネル62シートをすべて手作りで作成した。平成19年に筑後川中流域のなつかしい写真集を発行するにあたり、一般募集をしたところ新たに200枚ほどの水害写真が提供された。また、毎年の写真展を開催するたびに来場者が持ち込んで提供いただいた500枚ほどをあわせると合計2000枚以上の災害写真が収集できた。これらの写真をもとに、平成15年から**写真展を18年間継続**して、筑後川防災施設くるめウスを中心に九州国立博物館など**流域内外で合計63回**の企画展示を行い、今までに**延べ約７万人以上**の観覧者があった。平成28年からは、筑後川流域の他の市や町の公民館や図書館のロビーをお借りしての巡回写真展も年に2回ほど開催している。

写真展には体験者やそれ以外の方も多数来られ、写真を前に見知らぬ来場者同士で体験を語り会ったり、親子３代で来場し当時の話しを語り伝えたり、また一族郎党を引き連れ、あるいは近所同士、同窓会や老人会グループで来られたりと、今までにさまざまな交流で**記憶の掘り起こし**があった。

また、**この写真展が他と大きく違うことは、写真にたくさんの付箋紙が貼ってある**ことである。その付箋には来場者からの「ひとこと」が書いてあり、**写真に対する補足説明や感想**が貼ってある。これは、出来るだけ来場者の方々の声を集めようと、それぞれの写真に関する**「情報を付せん紙に記入」**してどんどん貼っていただくことを奨励している成果である。同時に**「聞き取り人」**を配置して、写真を見ている体験者から**体験談の聞き込み**も行なっている。このことで、元の写真の解説文の間違いや、不明だった写真の状況や場所がわかったり、写真に写っている人物がわかったり、数々の興味深いエピソードなど多くのことが明らかになってきた。また**「証言ノート」**に体験談を書いていただくことを行った結果、多数の貴重な証言や、感想が集まった。また当時の写真をアルバムごと持ってこられたり、関連の資料を持ち込まれたりして様々な発見があった。**体験者が自分の記憶や体験をこのまま埋もれさせたくないという思い**がひしひしと伝わってくる。

２．　昭和28年大水害体験者による証言発表会

写真展にあわせて行っているのが昭和28年大水害の体験者による証言発表会である。当時の体験談を発表していただける方を事前募集して、その方々が次々と体験談を発表されまた当日会場で飛び入りでの証言も出て、毎回5～10人程の発表者で熱気あふれる会となっている。平成16年から毎年実施し流域内出張を含めて、**合計26回の証言会で発表者の延べ人数は150人**ほどになり、この会への参加者は延べ600人以上になる。**体験者の話を直に聞くのは、リアル感があり、災害への関心度も高くなってくる。**

高齢の体験者にとっては、自分の記憶を伝えることで家族や友人たちと体験を共有し、またある人は誰にも言えなかった悲惨な記憶による長年の心のつかえを発表で開放する場ともなっている。

またこの会の中では**「聞き語り部(べ)」**が体験者から聞いた各地の大水害の様子を、スライド写真を使って詳しく解説している。証言発表会の最後には、大水害の被災地の様子を歌詞に込めた幻のレコード**「災害派遣の歌」**を流し、皆で唱和して当時の災害をイメージしてもらっている。

活動期間	自　平成１５年４月　～　至　令和　３年１０月（通算　１８年　　６ヶ月）

（整理番号：　　）

活動の必要性・緊急性：

近年、気候変動の影響と思われる自然災害は世界中で多発している。平成30年から令和3年にかけて久留米では4年連続で5回の浸水被害に見舞われるなど、過去より筑後川流域は梅雨時に襲う豪雨により毎年のように浸水被害が発生している。昭和28年に発生した大災害から68年が経過し、当時の記憶を持つ人々は年々減りつつあり、当時の写真は残っていても、その場所や状況が不確かなことが多い。

当会が、この戦後最大の水害を忘れ去られる事のないよう毎年の写真展と証言発表会を継続して実施することで、実体験者が健在なうちに、これらの記憶を掘り起こし、水害の怖さや日頃からの備えの大切さを学んでもらうことは緊急で必要な事である。また、災害に対する記憶の風化防止は緊急性を有している。

活動の効果・社会への波及効果：

①当時の記憶や情報を収集し公開することで、水害を知らない人や後世の人々に水害は過去のことでなく、**今も起こりうることを実感させる**ことができる。②実際に体験者した人の証言を聞くことでその場の様子がわかり易く伝わり、**災害を身近に感じられる。**③当時の大水害の写真を見ることで、当時の現場や周辺の様子が充分に思い返され、現在のその場所もひとたび水害となればそのようになることを、**住民が予想して災害に備える**ことができる。④自然災害の脅威は常に身近にあることを伝え、流域の人々の水害への備えの**心構えを持たせる**ことができる。⑤幻のレコード**「災害派遣の歌」の再発見**：証言発表会に持ち込まれたこの曲には被災地の様子がつぶさに描かれており、当時の被災状況が目に浮かぶ。このような思わぬ発見がしばしばある。

長年の活動の中で**具体的な波及効果として、平成29年7月九州北部豪雨においての朝倉市杷木地区住民の避難行動がある。前年にその地区で開催したこの写真展を見て、被災者の話を聞いた一部地区住民が災害の恐ろしさを実感して、避難経路の再確認などを実施し、難を免れた**と聞いている。

このほか、写真展を家族で見に来て、祖父から聞かされていた大雨の話は本当のことだったと目を丸くする孫の姿をみるなど家族間に生まれる暖かい交流も活動の効果といえる。

活動を実施する上での留意点、工夫された点、苦労された点：

・活動の当初から、できるだけ多くの**水害写真、資料、記憶情報を集める**ことに留意した。

・流域巡回展では、できるだけその地域の写真を選んで展示して、**地域の新しい情報を得る**よう努めた。

写真展　1）来場者に写真の情報を書いた**「付せん紙」**を多く貼ってもらうよう誘導した。

2）**「証言ノート」**を置いて自由に体験談を書いてもらっている。

3）**「聞き取り人」**を配置して体験者から当時の情報を聞き取った。

証言発表会　1）発表者を新聞記事などで一般募集するが、当日の**「飛び入り発表」**も奨めている。

2）来場者には**「体験談記入用紙」**も配り、前に出て発表できない人の体験談も集めるようにしている。

3）**「聞き語り部」**が出席できない体験者に代わって水害の状況を分かり易く解説する。

活動の今後の計画：

この写真展と証言発表会、聞き語り部の活動は今後も継続していく。体験者が年々高齢化していく中、体験談や集めた写真などを分かり易く整理してネットで伝えることや「**記憶の解凍**」としてモノクロからカラーの写真に変換する技術を利用してさらに臨場感のあるものにするなどして、後世に伝えていくことも考えている。さらに、ハザードマップと過去の水害の状況を重ねてさらに防災意識が向上するような取り組みも行う。この災害のことを紙芝居にして子供達にも伝えていくことも考えている。また、50年以上前には、筑後川大水害のように広範囲で甚大な被害をもたらした水害がいくつかあり（カスリーン台風や第2室戸台風など）これらの災害伝承活動している団体とも連携を図りたい。

応募推薦者（必要な場合にご記入下さい）

氏　名	大久保　勉	**推薦の言葉**　：昭和28年水害は当市にとって、大きな出来事のひとつであり、近年、毎年のように発生する浸水被害の軽減には、市民の防災意識の向上が非常に重要である。本会の継続的な活動は、この記憶を伝承し、避難行動につながる防災意識向上に大きく寄与することから、本賞の趣旨にふさわしいため推薦する。
所　属	久留米市 久留米市長	
氏　名	吉田　大	**推薦の言葉**　：本会は筑後川流域において市民間連携などさまざまな活動を行っている団体であるが、特にこの取り組みは激甚化する水害に対応するため当事務所で取り組む「流域治水」にも大いに資するものである。流域住民に災害に自ら備えてもらい命を守る取り組みであり、本賞にふさわしいものである。
所　属	九州地方整備局 筑後川河川事務所長	